

【研究論文】

教材としての古今集歌—韻文教材の価値—

西 一夫

一 はじめに

中学校国語科における和歌（韻文）の学習は、三年次の教材として位置付けられ、しかも現行の教科書では、全五社が「三大集」（万葉集・古今和歌集・新古今和歌集）として教材化している点で共通する。また採録歌に若干の相違がみられるもの、おおよそ共通した和歌が採られていると理解してよいだろう。

このような和歌教材から『古今和歌集』の採録歌を取り上げて、韻文教材としての価値や教材研究の方向などを示すことが本稿の目的である。

二 教材本文の採録状況

中学校の国語科教科書において『古今和歌集』の採録

状況は以下の通りである。

【2 東書 国語 927】四首

秋歌下（二九四・在原業平）・冬歌（三一五・源宗子）

恋歌二（五五三・小野小町）・離別歌（四〇四・紀貫之）

【1 学図 国語 928】四首

春歌下（八四・紀友則）・秋歌上（一六九・藤原敏行）

離別歌（四〇四・紀貫之）・恋歌二（五五二・小野小町）

【15 三省堂 国語 929】三首

春歌上（四二・紀貫之）・恋歌二（五五二・小野小町）

雑歌下（九三三・詠み人知らず）

【7 教出 国語 930】三首

春歌上（四二・紀貫之）・秋歌上（一六九・藤原敏行）

恋歌二（五五二・小野小町）

【38 光村 国語 931】三首

春歌上（四二・紀貫之）・秋歌上（一六九・藤原敏行）

恋歌二（五五二・小野小町）（注1）

全ての教科書が採録する和歌は見られないけれども、複数の教科書が採録しているのは、次の三首である。

春歌上（四二・紀貫之）【三省堂・教出・光村】

秋歌上（一六九・藤原敏行）【学図・教出・光村】

恋歌二（五五二・小野小町）

【学図・三省堂・教出・光村】

これら五社の教科書の採録状況は、基本的な部分において「季節歌と恋歌とを必ず採録する」という共通項を有している。なお、他社との競合が見られないのは〔2 東書国語 927〕である。

このような採録の傾向は勅撰和歌集である『古今和歌集』の特徴を顕在化することになる。つまり季節歌六巻と恋歌五巻とによって全二十巻の半数を二つの主題が占めていることから、その重要性が看取される。これは以降の勅撰和歌集にも引き継がれており、和歌の文学史的な観点から適切な選択がなされていると判断できる。しかも季節歌では春秋が各二巻立てになっていることから、この二季が重視されていたことが知られる。そのいづれかの和歌が必ず採録されている事実も『三大集』の教材化を考える上で見逃せない要素である。

ただし、『古今和歌集』の多くの和歌には詞書が添えられている。詞書は和歌が詠まれた状況を説明したり和歌の内容を補足したりする機能を持っており、作品を理解するための重要な要素なのである。にもかかわらず教科書の採録に際して、全ての教科書が詞書を削除して教材化している。詞書の中には「題知らず」（五五二・小野小町）と作歌の背景が不明な和歌があるものの、高等学校国語科の必履修科目「国語総合」における和歌教材（古今

集の教材化）のあり方とは異なる傾向を示している（拙稿「古典和歌教材研究―『国語総合』所載の万葉集・古今和歌集の活用―」『人文科教育研究』三二号、二〇〇五）。

以下、複数の教科書で採録されている季節歌と恋歌とを取り上げて教材分析の方法や教材化について検討をこなう。

### 三 季節歌の分析（1）―紀貫之の春歌―

まず春歌として採録されている紀貫之の和歌である。

これは『百人一首』にも収められており、春歌の中ではある程度知られている作品と言えるだろう。

初瀬にまうづるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、ほど経て後に至れりければ、かの家の主「かく定かになむ宿りはある」と言ひ出してはべりければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる

人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞ昔の香  
にほひける（春歌上・四二）

長文の詞書には、作歌の背景が詳細に記述されている。これを受けて和歌の内容理解へと進むことになる。基本的な教材化の作業では語注と傍訳などを利用しておおよ

その内容把握をすることになるのだが、「教出 国語 300」のみが詞書に書かれている背景を説明しながら和歌の内容について触れる解説文を附している(注2)。詞書に表れる主人と作者貫之とのやり取りを「親しさゆえの、機知に富んだやりとりといえる」とまとめている。

解説文の内容を理解して初めて和歌の理解が可能となるのであろう。作歌の背景等が記されている詞書の必要性が示されている作品と言える。特に紀貫之の和歌では詞書がなければ和歌本文の「ふるさと」の意味が判然としない。基本古語「ふるさと」は『古語大辞典』(小学館、一九八三)では、おおよそ以下のような分類となる。

- ① 昔、何か特別の事があつた土地。旧跡。
- ② 生まれ育つた所。故郷。
- ③ 以前住んだことのある土地。なじみの土地。
- ④ わが家。自宅。

この和歌では②の生まれ育つた「故郷」ではなく、③の意味で用いており、具体的には詞書の「宿りける人の家」と解さなくてはならない。また下の句「花ぞ昔の香」の「花」も嗅覚表現を伴うことから梅との推測が可能であるが、詞書をみれば「そこに立りける梅の花」と明示されている。いずれも和歌を理解するためには詞書の内容が必要であることは変わりないであろう。

このような詞書と和歌との関係からすれば、

私を責めるあなたこそ心変わりして、私を待っていないかつたのでは、とほめかしているのです。そして、「ふるさと」で今も変わらず咲き匂う梅の花をよむことにより、いつそう人の心の変わりやすさを感じさせています。【教出 国語 300】

この解説の内容も得心がいくのだと言える。だが、和歌の表現が理解できても、作者である貫之が梅の花を取り上げている意図が明瞭に示されているとは言えないのである。先掲の解説文末尾のように相互理解が成り立つゆえに「機知に富んだやりとり」と言えるものの、「機知」の内実には触れていないのが現実であろう。

この和歌の背景を考える上で「梅の花」が「人(あるじ)」と対比的に用いられている点が重要になる。単に梅が詠物の対象として詠まれるのではなく、人事的な内容との結びつきを強めていることと関連している(秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇)。このような傾向は当該歌のみならず、菅原道真の「東風吹かば…」(拾遺集・雑春・一〇〇六)、紀貫之の女とされる「勅なれば…」(拾遺集・雑下・五三一)等も同様な傾向を示す例歌となる。さらには『更級日記』の主人公と継母との贈答歌も同じ傾向にあることから、中学と高等学校との教材連携によ

る学習課題の設定も可能であろう(注3)。

和歌の教材として系統化され、螺旋的な学習によって効果的な学びを実現する上で、学習課題において「何を」「どこまで」「どのように」に取り扱うかについて、さらなる検討が求められている。

#### 四 季節歌の分析(2)―藤原敏行の秋歌―

次に秋歌上の巻頭に据えられる藤原敏行の和歌を取り上げる。

秋立つ日よめる

藤原敏行

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる (秋歌上・一六九)

〔光村 国語92〕では脚注で「秋来ぬ」とこの歌は、立秋の日に詠んだもの」とあり、詞書の内容を示している。また類似の脚注は「教出 国語93」にも「秋来ぬ 秋が来た」「おどろかれぬる (秋の訪れに) 気づかされたことだ」と見られ、秋の到来を詠んでいることがある程度理解できる。

詞書が省略された教材において、和歌内容を考える手掛かりは、傍訳に求められる。

秋がやって来たとはつきりと見えないが風の音によ

って自然にはっと気づいてしまう。

秋が来たど、目にははつきりと見えるのではないが、風の音に、はっとして気づかされたことであるよ。

〔光村 国語93〕

これらの傍訳からは、秋の到来を風の音によって気づかされたことが知られる。大まかな理解であれば、これでも十分と言えるだろう。ただし、「秋立つ日よめる」との詞書は、言うまでもなく「立秋」を契機として詠まれた作品であることを明示している。これをいかなる工夫によって和歌で表現しているかが表現の特質を見出すことにならなければならない。

初句「秋来ぬ」とは、完了の助動詞「ぬ」に表現の特質がある。中西宇一が「ぬ」は現在からさらに未来に亘って存続する状態の「今」における発生を表わす(注5)と述べるように、秋の確実な到来を意味する。このような秋の到来を感じ取りながらも、「目にはさやかに 見えねども」と確実な到来を視覚的に認識できていないと言っている。換言すれば、知識として暦法上は「立秋」を迎えていることから、秋がやって来ていることは承知しながら、それを裏付ける確実な要素が視覚では捉えられないのである。

このような知的な思考による認知と実感の認知との相剋による揺らぎを解消するのが「風の音」の存在である。

この風の働きを強調しているのが係助詞「ぞ」の機能であり、「光村・国語 931」が「ぞ」には、そのものだけを取り立てて強める意味がある」と脚注で述べるのは、表現の特徴を適確に示していると言える。風は吹き続けているのではなく、一瞬に吹き抜けた風に秋の確実な到来を感じ取ったと言えるのであろう。風は爽やかであったはずである。吹き抜けた後には、また変わらぬ暑さがやって来たのだらう。

結句「おどろかかれぬる」でも、初句と同じく助動詞「ぬ」を用いていることで明示している。吹き抜けた風によって秋の到来を感じ取っている、その確かさが係助詞「ぞ」との呼応によって強調されている。このような暦法の知識による季節の到来を、微かな自然の変化によって認識している点に、この和歌の特色があると言える。このような季節歌のありようは、春秋歌に顕著であつて、いずれもが待たれる季節であつたからだと考えられる。

このような和歌表現の特色を生徒に求めることは当然難しいだらう。だが、教材研究としての深化は求められるのではないだらうか。

## 五 恋歌の分析—小野小町の恋歌—

最後に恋歌から採録数が多い小野小町の和歌を取り上げる。

題しらず 小野小町

思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めさらましを (恋歌二・五五二)

前項の敏行歌と同じく発想や表現の技巧的な和歌である。表現の特徴を鑑賞する上では付属語や構文の理解がある程度必要となる。その一つは夢に思い人が現れると言う俗信であらう。また「せば…まし」の反実仮想の理解などがあげられる。これらの要素を教科書では脚注などを用いて以下のように解説する。

【学図 国語 928】

傍訳「寝るのであの人が（夢に）見えたのだらうか、もし夢だと知っていたならば覚めずにいるのだったのに」

【三省堂 国語 929】

脚注「寝ればや人の見えつらむ 寝たから、（夢に）あの人が見えたのだらうか」「夢と知りせば 夢だとわかつていたなら」「覚めさらましを 目を覚まさなかったのに」

「教出 国語 330」

脚注「覚めざらましを 覚まさなかつただろうに」

【光村 国語 331】

脚注「思ひつつ ここでは、（恋しいあの方を）思いながら」「見えつらむ （夢に）現れたのだろうか」

傍訳「恋しく思い続けながら寝たので、あの方が現れたのでしょうか。夢とわかつていたならば、覚めないでいたでしょうに」

これらの脚注や傍訳を参照することで和歌の内容を理解することはある程度可能となる。ならば、「夢と知りせば 覚めざらましを」と夢から覚めなければよかつたとの嘆息とも取れる反実仮想の表現の効果は、第三句「見えつらむ」の強い確信を持った表現との対応によって導かれるだろう。自己の対象に対する不変の思いによる達成と喜び、一転して夢であることを承知しながらはかなくも消えてしまう現実に対する嘆息。そうした纏綿と繰り出される恋心を、反実仮想の構文と「見えつらむ」の表現とによって示していると言える。

脚注や傍訳を参照しつつ解釈できても、言葉や表現の背後にある考えを理解しなくては、和歌に詠まれた内容の理解には十分届かないのではないか。季節歌と異なり、心情を表現する恋歌の理解は難しいと考えられる。

それは描かれた情景や心情の理解はある程度可能だとしても、そこに込められている恋情に対する共感には得にくいと考えられるからである。この傾向は「東書 国語 327」が採録する同じ小野小町の「うたたねに 恋しき人を見てしより 夢てふものは 頼みそめてき」（恋歌二・五五三）にも看て取れるだろう。理知的、技巧的と称される『古今集』の特色の一つとも言えるのだろう（注 6）。

このような恋歌に見られる特色を理解した上で教材として取り上げる際に見逃せないのは、初句の「つつ」である。動作の反復や継続を示す「つつ」は、「思ひ」の強い表明であり、その結果として「見えつらむ」と言う揺るぎない確信を導いている。この確信を打ち砕くのが、冷静な眼差しで現実を捉えた反実仮想の下句だと言えよう。

この和歌について、俵万智は次のような解釈を示している。

夢は、しよせん夢。はかないものだということには作者だって百も承知している。けれどそれでも、夢に頼るしかないという哀しさ。現実は、もしかしたら夢よりもはかないものかもしれないという気持ちだが、彼女にはあつたのではないだろうか。（注 7）

夢と現実との対比によって、作者は夢に想いを託している。これは現在では十分に理解が届かない夢に対する解釈を持っていたからであろう。そうした夢と現実との理解や、恋情の表現方法等の情感に関する昔の人のものの見方や考え方の一端に触れる貴重な機会として、和歌教材を位置付けることも試みとなるのではないか。

## 六 まとめ―学習課題との関連―

以上のような分析の立場は和歌を解釈するためのものであり、これらの和歌が教材として和歌（韻文）単元に位置付けられていることを忘れてはならない。単元における目標あるいは学習活動を整理すれば、すべての教科書がおおよそ①「音読活動」②「背景を想像して情景や心情の理解」を基本的な学習内容とし、さらに発展的な活動として③「鑑賞文の作成」を位置付けている。これらの要素は現行の学習指導要領では、①が「作品の特徴を生かして朗読するなどして古典の世界に親しむ」(3年「伝統的な言語文化」ア(ア))、②が「ものの方方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像する」(2年同ア(イ))、「歴史的背景などに注意して古典を讀み」(3年同ア(イ))に相当する。また③は1年「書

くこと」ウ「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと」に位置づけられ、あわせて「言語活動例」のア「関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」にも対応している。つまり、学習活動は学年に対応した内容であり、音読（朗読）が学習活動の主要な位置を占めている。韻文のリズムを意識して音読する、その上で詠まれた背景等を捉える学習へと深化し、印象的な教材を取り上げて、その理由等もあわせて鑑賞文にまとめる一連の活動が立ち現れてくる。

このような学習が実現するためには、具体的な学習の契機となる音読が大切になる。本稿で取り上げた三首の教材は、藤原敏行と小野小町との和歌は三句切れである。かたや、紀貫之の和歌は二句切れと考えられる(注8)。つまり教科書教材としての『古今和歌集』の和歌には、その特色の一つである「七五調」の韻律をすべての教材が有していないことになる。音読（朗読）が学習の起点であることからすれば、三大集としての『古今和歌集』の特色が捉えにくくなるのではないか。

教材として採録されるには、以下のような要件が存すると推測される。

巻立（歌集の構成）・作者・歌風の特徴（修辞等）

さらに加えるならば和歌集を代表するような作品であることが求められているのだろう。それゆえ有名歌人の和歌が教材化する傾向なのが現状と言える。つまり学習内容を達成するために教材が選択されているのではなく、各和歌集の秀歌撰としての意味合いが強く表れていると考えられる。

中学校での学習の目的が音読を中心にした定型リズムに親しむ点に重点化するのであれば、秀歌撰である必要性はなくなるだろう。それぞれの特色ある韻律を表現している和歌が採録されることとなる。このような音読中心の学習を受けて高等学校の和歌教材では、修辭技巧や内容理解、さらには歌風と言った深化した理解を求める教材化がなされることになるのだろう。その意味では、中学校の和歌教材に詞書が附されず、高等学校では詞書を附して教材化されていることも了解されるのである。

### 【注】

- 1 出典表記を「恋歌上」としているが「恋歌二」の誤りである。
- 2 「光村 国語 93」では解説文等はないものの「人はいさ心は知らず」の脚注で詞書の内容を解説している。
- 3 「梅」が持つ特性については、渡辺秀夫『詩歌の森—日本語のイメージ—』（大修館書店、一九九五）参照。

4 「教出 国語 930」には脚注（秋来ぬ・さやかに・おどろかぬぬ）のみで傍訳はない。

5 中西宇一「発生と完了—ぬ」とつ—」（『古代語文法論助動詞篇』和泉書院、一九九六）参照。

6 教科書では『古今集』に対して以下のような説明が行われている。「四季の風物や人間の愛情を機知に富んだ表現で優しく細やかに歌ったもの」（『東書 国語 927』）、「技法を工夫して現実を美しく再構成した者が多く」（『学図 国語 928』）、「表現に技巧を凝らした繊細優美な歌が多い」（『光村 国語 931』）

7 俄万智『短歌をよむ』（岩波書店、一九九三）参照。

8 各教科書が底本とする注釈書（新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集）を参照しても軽い二句切れと解釈して問題はない。また傍訳等が付されている「三省堂 国語 929」や解説文がある「教出 国語 930」でも傾向は変わらない。

### 【附記】

本稿は『古今和歌集総索引』（西下経一と共編、明治書院、一九五八年）の作成から研究を開始され、平成二八年一月二〇日に急逝された本学名誉教授滝澤貞夫氏の御霊前に捧げる。

（平成二九年八月晦日）

（にし）かずお 信州大学教育学部